

「経験通じでできること増やす」

福井市の旧美山町南東部の上味見地域を主なフィールドに、小中学生対象のキャンプ活動を展開するNPO法人自然体験共学センター。防災士の資格を持つ理事長の細川和朗さん(29)は「普段の生活と違った環境で生活するキャンプと災害時には共通点がある。経験を通じ、生きる力を身に付けてほしい」と話す。

キャンプの食事作りは火をおこすところから始まる。ドラム缶風呂も、まきで火をおこして湯を沸かす。「避難所では実際にやらないかもしれないが、自分自身でできることを増やせる」と細川さん。森の中にテントを張って、動物の鳴き声や、木々のさざめ

災害時と多くの共通点

小中生向けキャンプ企画細川さん

きを身近に感じながら眠る。「食事を作る、テントに泊まる」といったことを災害時に初めてするのは、キャンプで経験をしているのでは大きく違う」と指摘する。

川で泳いだり、湧き水を求めてハイキングしたり、活動内容は子どもたちが「森の子会議」で意見を出し合って決める。数日間の経験を通じて「自信が付いた」と話す子どもも少なくない。

細川さんは「自分のことは自分で決め、自分でする。普段の生活では知らないことにキャンプで遭遇し、被災時の生活を考えるきっかけになる。自分が何ができるかを考える力と、困難な状況を受け

入れる力を付けてもらえたら」と話している。

同センターは7月24日から「2019ふくい夏の自然体験キャンプ」を開く。2泊3日から4泊5日まで難易度と日程を分けた12コースがある。詳細はホームページ(「自然体験共学センター」で検索)に掲載している。問い合わせは同センター＝☎0776(93)2013。



テント泊を楽しむ児童たち。細川理事長は「経験を通じ、生きる力を身に付けてほしい」と話す＝2018年8月6日、福井市中手町(自然体験共学センター提供)